

E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（2）：カー 著伝記『浪漫的亡命者たち』に関する分析

河村，しのぶ
元九州大学大学院法学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7340409>

出版情報：総合文化学論輯. 21, pp.19-38, 2024-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン：

権利関係：Copyright (C) 総合文化学研究所 all rights reserved. この論輯の全ての文章・画像の権利は、総合文化学研究所に属します。無断での使用・転載を禁止いたします。



E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（2） —カー著伝記『浪漫的亡命者たち』に関する分析—

河村 しのぶ

はじめに

本稿は、E・H・カー(Edward Hallett Carr, 1892-1982) が 1930 年代という彼の初期思想形成過程において、人間の理性の可謬的性質へ着目していたことを明らかにすることを目的としている。

すなわち、理性における可謬性とは、この時期のカーに、肯定的に擁護されてきた視点であることを明らかにする。

本稿は拙稿「E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（1）：カー著伝記『ドストエフスキー』に関する分析」の続編である。

上記の命題を明らかにする一連の研究のうちの第二段階として、本稿はカー著『浪漫的亡命者たち』（1933）をテキスト分析する。この、人間の理性は可謬的性質を有するというカーの視点の起源は、当時外交官としてラトヴィアのリガに赴任していた彼が、ロシア語とロシア文学という異文化と邂逅したのち、ロシア人の知識人たちを中心とする伝記作品を執筆する過程で認識した、人間の理性に対する過信への危惧である。

拙稿河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b においては、カーの 1930 年代の知的営為に一貫する否定的かつ批判的視座を明らかにした。その批判的視座とは、超越的な原理に基づく知識形態に対するものであった。

また、上記の拙稿四論文においては、人間の思想は時代や置かれた場所により制約を受けるというカーの主張に照射した。このために、前掲四論文は、彼が 1930 年代に著した四冊の伝記作品すべてと、彼を国際政治学の祖と世に認識せしめた、この学問領域の古典『危機の二十年』（1939）をテキスト分析した（河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b）。

本稿は、逆説的にカーが 1930 年代に肯定的に擁護したものについての研究であり、上記の拙稿四論文の続編的な研究に該当する。そして、上述のように、カーが擁護したものこそ、人間の理性の可謬的性質であると筆者は考えている。

大学時代までのカーは、ハスラムによるカーについての伝記にもあるように、「19 世紀イギリスの自由主義的な信念に浸りきっており、それに疑義を抱くことはなかった」（河合 2008、452 頁）。

周知のように、19 世紀イギリスの自由主義は、啓蒙思想と産業革命の影響を受けながら個人の自由、法の支配、経済的自由、議会制民主主義などを重視する政治思想として発展し、その中核には、理性に対する非常に楽観的な評価があった。

ウッドロー・ウィルソンの「十四か条の平和原則（1918）」に代表されるような、戦争は非合理的なものであり、理性に基づいた国際機構（国際連盟）を設立することによって戦争は予防できるという考え方は理性の力を過信する楽観論であったともいえる。

この理性に対する過信こそ、カーが国際政治学を打ち立てた際、『危機の二十年』において、理想主義として批判したものである。

本稿は、『危機の二十年』におけるカーの理性に対する主張に連なる、彼の思想形成過程のという位置づけで『浪漫的亡命者たち』という彼の作品を研究するものである。本稿は、なかでも恋愛というテーマから、カーが理性の可変性と限界を明らかにし、人間の可謬性について考察を深めた過程を分析する。

次に本稿の構成を述べる。本稿は序としての「はじめに」に続き、「Ⅰ．問題の所在」、「Ⅱ．ナタリヤ・ゲルツェンの理想」、「Ⅲ．ナタリヤの理想の可謬的性質に対する指摘」、「結語」の順に構成されている。

以上、本稿の構成を述べた。以下からは、先行研究を検討し、さらに本稿の問題意識について述べる。

Ⅰ．問題の所在

カーは『危機の二十年』において国際政治学を打ち立てることを試みた際に、ユートピアニズムとリアリズムを並置し、古いユートピアニズムはリアリズムに対照されたのちには打破され、その後に新しいユートピアニズムが築かれる必要性を説いた（Carr 1939, p.118: カー 2011、190 頁、河村 2024a、37 頁）。

カーによるこの議論方式の起源は、カーの著した伝記作品群の研究過程にあると筆者は仮説を立てている。この伝記作品群研究期間に、カーは人間の理性は、誤謬をはらむものであり、理性に対する過信への危惧を募らせていった。そして、この人間の理性の可謬的性質こそが、ユートピアニズムに対してリアリズムを用い、それがいかに現実と合致または乖離しているかを見極めた上で、新たなユートピアニズムを打ち立てる必要性を説くことにつながっていると、筆者は考える。

つまり、ユートピアニズムの根幹をなす合理主義的な理想とは理性の産物であり、知に依拠する理性とは時代と場所に制約された人間の思想にすぎず可謬的である。可変的かつ仮設的であり、誤謬をはらむ理性の産物としての理想であるユートピアニズムは、したがって即物的現実によって対照されなければ、現実は次第に理想とは乖離していくことをカーは察知した（河村 2024a）。

カーのユートピアニズムとリアリズムに関するこれまでの議論の総括や、ユートピアニズムとリアリズム、その両者とカーが認識した人間の理性の可謬性の関係性については、本稿の目的の範疇を越えるため、別稿にて詳述する。

本稿は前掲論文である河村 2024a の続編として、そして今後数稿にわたって、将来的

な課題であるユートピアニズムとリアリズムの詳細な研究を行う前段階としての研究を行う。つまり、河村 2024a と同様に、いかにしてカーが人間の理性に限界を発見していったかを、ロシア人の知識人たちを中心とする伝記作品の登場人物の理想もしくは、理想の基盤となる理性へ着目し、カーのテキストにおける彼の描写を追うことにより、明らかにしていきたい。

以上のことを明らかにするために、本稿はカーの第二の著作である伝記作品、『浪漫的亡命者たち』のテキストを分析する。

本稿では、主として、アレクサンドル・ゲルツェン(Aleksandr Herzen)の妻であるナタリヤ・ゲルツェン(Natalia Herzen)の理想と、それがいかに現実と乖離しているか、そして、そのことによる悲劇に着目したい。

なぜならカーはナタリヤ・ゲルツェンを浪漫主義、なかでもジョルジュ・サンド(George Sand)的な思想に「最も忠実であった」人物として描き、彼女こそが「浪漫思想の生んだ本当の娘であった」と表現している(38:34)¹。

元来、『浪漫的亡命者たち』の主人公はアレクサンドル・ゲルツェンと先行研究では考えられてきた傾向がある(飯田 1954、西村 2010c、西村 2012)。確かに、アレクサンドル・ゲルツェンはこの物語の中心的人物の一人であることは疑いようもない。しかし、『浪漫的亡命者たち』と複数形で書かれているこの物語の浪漫主義的な亡命者たちには、他にも、主要な人物が数名存在する。たとえば、ナタリヤ・ゲルツェン、ゲルルク・ヘルヴェーク、ニコライ・オガリョフ、ナタリヤ・オガリョフ、そしてミハエル・バクーニンなどである。

『浪漫的亡命者たち』は全体で17章と1章の「あとがき」で完結する物語である。しかし、その構成、すなわちプロットのうち、第12章でアレクサンドル・ゲルツェンは死去するのである。このことは、アレクサンドル・ゲルツェンがこの物語において主要な人物の一人であることにまちがいはなくとも、必ずしも唯一無二の主人公であるというわけではないことを示しているのではないか。

さらに、カーは第1章から第4章までの訳130頁を割いて、ナタリヤの理想に殉じた人生とそれに伴う悲劇を描いている。これは、物語全体の約31%を占めており、そのことから、ナタリヤの理想と現実の乖離とは、いかにカーが強調したい本質であるかを物語っている。

ジョルジュ・サンドの説いた愛の宗教に翻弄された、ナタリヤ・ゲルツェンの理想は確かに「博愛の精神」であったが、その理想の解釈と実践には誤謬が明白に存在していた。本稿では、理想というものの解釈をめぐる人間の理性の可謬性に焦点をあて、主義や原理

¹ 本稿において、これ以降、著作名や出版年がなく、括弧内に数字のみを記している個所は、『浪漫的亡命者たち』(1933)のページ数であり、括弧内の前半が原著のページ数、後半が邦訳のページ数を意味する。

を妄信することの危険性を訴えるカーの姿勢に迫っていくこととする。

そのために、本稿ではアレクサンドル・ゲルツェンではなく、「浪漫的時代の子であり、犠牲者であって、決してこの時代を超えるほど成長しなかった」ナタリヤ・ゲルツェンの思想に着目しながら、カーのテキストを分析していく（116：128）。

II. ナタリヤ・ゲルツェンの理想

1. ナタリヤの理想としてのサンド的な浪漫主義

本節では、ナタリヤ・ゲルツェンの理想する浪漫主義と、一種の「信仰」とカーが表現するジョルジュ・サンドにより流布された浪漫的な愛について検討することとする。

カーは、イギリスと大陸ヨーロッパにおける浪漫主義運動の違いについて言及している。イギリスでは、浪漫主義運動は、『自然』への崇拜と、麻痺した因襲の手から文学を開放する運動にとどまったものである（27：22）。対照的にヨーロッパでは、浪漫主義運動とは、『人間性』に対する崇拜と、精神的、政治的絶対主義の軛から個人を開放する運動であったとカーは指摘している（27：22）つまり、カーの解釈においては、ヨーロッパではイギリスとは異なり、人間の思想のあらゆる方面に浪漫主義が広がったという（27：22）。

カーによると、初期の最も特色のある時期においては、浪漫主義とは宗教や道徳に対する反対運動とみなされるものではなかった。しかし、ヨーロッパでは浪漫主義者たちは、人間性に対する崇拜によって「新しい道徳律」を打ち立てた（27：22）。その代表的な例の第一としては、ルソーによる感情の神格化が挙げられる。カーは、ルソーの浪漫的信条とは「人間の感情は、天性善良であり、人間行為の案内者として十分資格がある」ものであるという（63：63）。

そしてサンドは、そのような「ルソーの教義を発展させた」人物であるとカーは論じる（63：64）。ルソーこそが、浪漫的信条の創設者ではあった。しかし、それを「世に広め、俗化せしめた」のはサンドであったとカーは論じる（63：63）。

河村 2022b でも明らかにしたように、カーによるサンドに対する評価は、決して高いものではない。カーはサンドを「現代の読者なら、この著名な夫人の中に見出せるものは、慰みに読むに足るほど面白くはなく、さりとて、一流と重んずるほど堅実ではない、素朴でひどくセンチメンタルな小説家にすぎない」と表現している（63：63-64）。

サンドの浪漫的信条をカーは、以下のように表している。

人の感情の中に、美德が存在するとするならば、そういう感情の中でもっとも高貴なものは、言うまでもなく愛であって、愛することは、したがって、無上の徳行である。古典主義的な18世紀においては、恋愛は、人の心を一番高ぶらせる気晴らしとし

て楽しまれていた。それは 19 世紀に任されると、浪漫的美徳の極致となり、浪漫的宗教の秘蹟となったのである² (63：64)

このようにして、ジョルジュ・サンドによる普遍的な「愛という宗教」が打ち立てられた (27：22)。

カーは、この「愛という宗教」の核心を抽出するために、・ジョルジュ・サンドが著した『ジャック』という作品から、そのヒロインの以下の台詞を引用している。

心の赴くままに身を任せることが、なんで悪いのでしょうか。人が自分を悲しんで涙を流し、聖火を絶やしてしまったことを恥じるのは、もう人を愛せなくなってしまった時なのです (63：64)

すなわち、「新しい女性」は「人を愛した時ではなく、愛人が見つからなかったときに、己を恥じた」のである (63：64)。カーは以下のように続けている。

夫婦間の貞操とか、汚れなき処女性とかいう、身も蓋もない理想は、——すでに男性を満足させえなかったように——彼女の意を満たすことはできなかった。愛の神の前に初めて両性は平等となった。聖なる焰は、男女両性にその権利のあることを立証した。それは不可抗であり、神聖であって、逆らうことは無駄でもあり、神聖を汚すことでもあった (63-64：64)。

つまり、サンドに従えば、永久に愛の対象を見出すことこそ、生きる意味であり、それこそが浪漫的啓示であるのである。

ロシア人ロマン主義者が最も影響を受けたのはサンドの思想であり、カーによると「ヨーロッパでは、ロシアほど彼女の影響力が効き目を現し、人を夢中にさせたことはない」という (64：65)。

この浪漫主義運動は、1848 年と 1849 年の革命を経て消滅するが、ロシアにこの運動が広がったのは、1830 年代以降のことであった。この運動は 30 年代 40 年代に開花し、60 年代まで消えなかった。『浪漫的亡命者たち』の登場人物たちは、ロシア特有のロマン主義の開花期である 1830 年代および 40 年代世代であるということをカーは強調している (27-28：22-23)。

浪漫主義運動、より厳密に言えばサンドの思想が、1830 年代から 40 年代に若者であったロシア人に大きな影響を与えたというカーの主張の証左として、カーが挙げている数々

² 引用に際しては、1953 年に出版された邦訳の原文に忠実に表記している。そのため、現在とは違う漢字を使用している場合もある。

の一次資料のうち、ここでは、ロシアを永久に去り、ヨーロッパへ向かう二か月前、すなわち 1846 年の晩秋に書かれたナタリヤ・ゲルツェンの日記を引用することとする。これにより、ナタリヤが、いかにサンド的思想を聖なる理想であると信奉していたかという「信仰告白」を示し、この節を結びたい。

おお偉大なるサンド！何と奥の奥底まで、人間性を洞察していることか！何と敢然と生ける魂を、罪業と背徳に屈することなく支え通し、全てを燃えつくすこの焰の中から、無傷のままに取り出すことであろう！四年前ボットキンは、サンドのことを、女の基督だといった。おかしなことを言うと思ったけれども、それには大いに道理があるのだ（64：65）。

このように、ナタリヤはサンドの思想に陶醉している。カーは、このようなナタリヤのサンドに対する憧憬を総括して以下のように述べている。

愛が神であることは、ナタリヤにとっては、デュドヴァン夫人（サンドの本名）にとってと同様に、欠くべからざる一つの信仰箇条であった。そして二人とも、およそ信仰箇条は実際生活に表せるようにできていると信じていた。愛することが不都合であるはずがなかった。愛は神聖なるが故に、それをじかに味わっているものには勿論のこと、その周囲の人たちにも幸福を注ぐに違いないのである（65：66）。

すなわち、愛は神であるがゆえに、その愛は恋愛の渦中にいる者たちだけではなく、その周りの皆を幸福にするという。この信仰に基づき、次節で検討するナタリヤとアレクサンドル・ゲルツェン、ゲルオク・ヘルヴェークと彼女の三角関係は、彼女の理想として彼女には成立するのである。しかし、その三角関係は、彼女の信仰と理想とはうらはらに、関係する人々のすべてに悲劇をもたらせた。彼女の理想は可謬的であったためである。

以上、本節は浪漫主義とサンドの示した浪漫的な愛を定義し、いかにナタリヤがその思想に心酔しているかを、ここまで概観した。

以下からは、博愛の精神を基にして浪漫的な愛の実践を試みたナタリヤ、アレクサンドル、そしてアレクサンドルの友人であるゲルオク・ヘルヴェークの三者の関係を通して、ナタリヤの理想をカーがいかに具体的に描写しているかを検討していく。

2. ナタリヤの理想の実践

本節ではドイツ人であるゲルオク・ヘルヴェークという人物と、ナタリヤの恋愛関係、それに巻き込まれたアレクサンドル・ゲルツェンの三角関係をナタリヤの理想の実践として描くカーのテキストを分析していく。この過程を経て、次章では、人間の思想や主義が

いかに可謬的なものであるかを、現実になにが起こったかを記すカーのテキストにしたがって検討する。

ヘルヴェークは、ゲルツェンの友人であり、詩人であった。ヘルヴェークも、ゲルツェンのように文学者であると同時に革命家であった。カーによるヘルヴェークの評価は「ドイツ文学史において、控えめではあるが注目すべき地位を占める人物である」というものである（49：47）。

またカーはヘルヴェークを「美貌で、浪漫的で、成功した青年詩人はあらゆる人の心を引いた」と描写している（49：47）。

1843年に魅力にあふれたヘルヴェークはエンマ・ジークムントという裕福なベルリンの商家のユダヤ人女性と結婚していた。

「若い二人が初めて会ってから、すぐに続いて婚約がなされた」ほど、ヘルヴェークとエンマは互いに強く惹かれあっていた（49：47）。

1848年パリで革命が起こったのち、革命家でもある彼は、自身の祖国であるドイツにも共和国を樹立するための革命を起こそうと考え、義勇軍を組織した。しかし、ヘルヴェークの率いる義勇軍は敗北し、彼はパリに逃げ帰った。

カーは、ヘルヴェーク一人にこの惨事のすべての罪が押し付けられたいきさつを強調している。さらには、ヘルヴェーク夫妻は「正規軍が近づきつつあると聞くや戦わずして逃げうせてしまった」とバーデンに報告されたとカーは記している。しかし、カーは、この「伝説」は、「委曲をつくしてあっても、出所疑わしきものとして、退けねばならない」と付け加えている（51：49）。

ヘルヴェークは、後に「ドッセンバッハの屈辱」と呼ばれるようになるこの敗北により、名声も財産もなくした。彼は深く落胆し、その傷心をエンマのせいにした。「強いて彼にあの馬鹿げたバーデン遠征をさせたのは、結局彼女がおせっかいで無考えに熱狂してしまうからなのだ」という考えがヘルヴェークに浮かんでいたことをカーは記している（53：51）。

次第に、ヘルヴェークとエンマの関係性も変化していった。彼らの結婚生活が六年たったところ、エンマがヘルヴェークを英雄として崇拜する気持ちにも陰りが見えてきた。

ヘルヴェークがゲルツェン夫婦と親しくなったのは、そのような折であった。政治上の恥辱と経済的困窮に直面した時期に、ヘルヴェークはゲルツェン宅を、ほぼ毎晩訪れた。

当時ゲルツェンには、親しい者がいなかった。しかも「絶えず人と交流している必要を感じていたほどには若かったため、社交相手を欲しがっていた」（53：52）。

カーによるとゲルツェンにとって「政治上意見を同じくしていることは、友情が本当なものであるしるしとなった」。さらには、ゲルツェンは「たいていの人がそうであったように、一目見て、このドイツ詩人の生き生きとした知性と社交的魅力にほれ込んでしまった」のであった（53-54：52）。

ゲルツェンは、友人ヘルヴェークの傷と弱さを支えることに誇りを見出した。カーは、

ゲルツェンのヘルヴェークに対する感情を「弱者を庇う男の虚栄心が、ゲルツェンには強かった」と描写している（54：53）。

一方ナタリヤにとってヘルヴェークは、「彼女が理想とする男性美を備えている浪漫的英雄であった」として、カーは描いている（55：53-54）。

ナタリヤが、そしてロシア人浪漫主義者たちが、ジョルジュ・サンドの影響を強く受けていたことは先述とおりである。ゲルツェン夫妻は、ヘルヴェークに対して博愛的であり、彼を救済することが自分たちの使命だと信じていた。ヘルヴェークに対するナタリヤの最初の感情は、確かに、「博愛精神に基づく愛」であったことをカーは強調している（55：54）。カーは次のように記している。

ナタリヤの考えは、夫のそれと同じく博愛的であった。浪漫的女性の「この世における使命」は、ジョルジュ・サンドの主人公の一人が言っているように、「不運なものを慰めること」である。彼女は自分が、自分だけが、ヘルヴェークを救済できる、という気がした。彼女は今まで一度も使わずにきた暖かい思い遣りと愛情を、余すところなく彼に注いだ。（55：54）。

ナタリヤにとって、この三者の関係はサンド的な愛の実践であり、最初、この三人の浪漫主義者たちは、自分たちの関係の崇高さに酔いしれていた。カーは次のように記している。

ヘルヴェークとナタリヤとゲルツェン（エンマは間の悪い、自ら欲せざる第四者として）との間に、今や出来上がりつつある三角形の親交は、これら浪漫教の信者たちには、人間的友情の最も高遠な理想を実現するものに見えた（56：54）。

このようにサンド的な「愛の宗教」の実践として、三者の関係は始まったが、カーはナタリヤとヘルヴェークの間には最初から違いがあり、限界があったことを記している。これについては後述する。

ナタリヤの想いも、本人が自覚しないうちに次第に変化していく。それは彼女の無意識のうちに、恋愛としての愛情へと変わっていったことをカーは描いている。

ただヘルヴェークを愛することこそ、ナタリヤが生きている証なのであると、ナタリヤは多数の書簡に綴っており、カーはその彼女の心情と理想の強固なことを、多大な数の引用を用いて示している。

若くしてゲルツェンと結婚したナタリヤは、夫を崇拜し、夫を頼りにする従順な妻を演じてきた。しかし、歳月が過ぎてゆく中、夫では、自身の心を満たさない部分があることを彼女は自覚するようになる。カーによると力強い夫とは対照的に、無力であること、一人では生きていけないと公言するヘルヴェークに異性として惹かれたナタリヤの心情をゲ

ルツェンは知りえなかった。やがて、ナタリヤとヘルヴェークは恋愛的な愛情を打ち明けた（59：59）。カーは、このころのナタリヤを「この高められ、清められた気分のもとに、ナタリヤは前後を忘れて盲滅法に、ゲルオク・ヘルヴェークの広げた腕の中に飛び込んでいった」と描いている（60：60）。

しかし、この段階においても、ナタリヤは彼女の理想の可謬性を一向に顧みていない。彼女は、三人による愛は姦通という形をとってもなお、皆を幸せにする愛であると信じていた。カーは以下のように記している。

姦通で調整された家庭の和合というようなものは、とても実現できない空想だとは、彼女にはどうしても信じられなかった。——それではひどすぎて、本当だとは思えなかったのもあって、どんなに苦い経験もこの点で彼女の迷夢を覚ますことはできなかった。もし事態が悪くなるならば、それはほかの者が至らなかったからである。ゲルオクの愛し方が足りなかったためか、でなければアレクサンドルが理解しかねたためである。（中略）死ぬまで彼女は、自分の動機と行動が潔白であると深く信じ切っていた（65-66：67）。

このように、彼女は自らの理想の可謬性を全く考慮していない。ナタリヤの理想について、ここまで見てきたが、カーからの次の引用を示すことによって、この考察を終わることにする。

ほかのことが一切期待に背いた時でも、彼女の愛を信ずる気持ちは、始めと変わらなかった。「私は生きたいのです」と死ぬ数か月前、ヘルヴェークにあてた最後の手紙の一通を見ると、胸を打つ結びの言葉が書かれてある。「愛する、愛する、ただ愛するがために……」（66：67）。

彼女のサンド的な浪漫主義に対する信仰は生涯、不変であったのである。

以上、本節では前節で記した、サンド的な愛を中心とした浪漫主義の実践としての、ナタリヤのヘルヴェークに対する愛について概観してきた。

次章からは、そのようなナタリヤの理想がはらんだ誤謬を指摘するカーの描写を追うことにより、人間の可謬的性質についてのカーの思索を検討していく。

Ⅲ. ナタリヤの理想の可謬的性質に対する指摘

本章では、前節で検討したようなサンドの影響を非常に強く受けたナタリヤの理想が、いかに可謬的であるかというカーの視点をカーのテキストを分析することにより、明らかにしていく。そのために、本章では、第一に、ドイツ人のヘルヴェークやエンマにとって、

ロシア人浪漫主義者たち、特にナタリヤのサンド的愛という理想は誤謬を含んでいると感じていたことを明白にする。第二に、ナタリヤが博愛精神に基づく純粋な愛であると信じていたそれは、結局その対極にある「肉体的快樂の神秘」以上の何物でもなかったというカーの指摘を重視する（79：83）。それにより、主義や理性に基づく理想がいかに可謬性を帯びているかというカーの示唆を解明する。

1. 浪漫的な愛に対する解釈の誤謬性

本節では、ナタリヤが理想としたサンド的愛の解釈は、明らかに誤謬を含んでいることを、文化的背景の違うヘルヴェークやエンマの視点からカーが描く様を追うことにより、カーの示唆する理想の可謬性について検討したい。

先述の通り、ナタリヤは、愛は神聖なるがゆえに、それをじかに味わっているものと言うまでもなく、その周囲の人間すべてにも幸福が注がれると信じて疑わなかった。

ナタリヤは、ヘルヴェークにあてて書いている。

私はいつか未来の世界へと這入って行きます。——みんな、みんな仕合せになるでしょう。私たちはだれもかも仕合せにし、私たちみんなの間に、和合と平穏を生み出しているでしょう。——子供たちは朗らかになって、子供同士の間さえ思い遣りが生まれるでしょう。——あの静かな完全な雰囲気——自然美——の中で、さぞ私たちは大きくなっていくことでしょう（65：66）。

ナタリヤの理想にとっては、この三角関係が博愛の基に築かれたものであり、サンド的な浪漫的な愛という彼女の理想の具現であったが、最初から博愛的救済とサンド的愛の実践の解釈が異なっていたこれらの人物たちの間で、サンド的な博愛は、瞬間に自己満足的な不適切な恋愛関係へと変化していったのである。当然のごとく、彼ら三人の物語は「悲劇」と化していく。

浪漫的な30年代ロシアに育ったナタリヤは、この熱情的な友情に、何も危険を感じなかった。西欧人のヘルヴェークは、時には疑いを感じたことであろう。西欧の文明には、また別の因習が行われていたのである。この三角関係はそれぞれに異なった必要条件に酔っていたわけである（57：56）。

すなわち、サンド的な「愛の宗教」の実践として、始まった三者の関係について、カーはナタリヤとヘルヴェークの間には最初から違いがあり、限界があったことを以上のように指摘しているのである。

カーはさらに、続けて「ヘルヴェークは、姦通を、誰にも行き渡る幸福の源泉だと信ず

るには、あまりにも世故長けていた」と記している。

ナタリヤは、エンマ・ヘルヴェークに手紙を書き、ナタリヤとアレクサンドル・ゲルツェン、そしてゲルオク・ヘルヴェークの滞在しているジュネーヴにきて「愉快な一団に加入するように求めた」(65:67)。

エンマは、この手紙を読んでそれを「ナタリヤの偽善の此の上もない証拠」であるとみなした(65:67)。

カーは、しかしながら、事実はこの時ほどナタリヤが誠実だったことはなかったと記している(65:67)。なぜなら、ナタリヤは「愛においては独占権を主張しえるものとは認めなかったし、そのようなことは、取り上げて考えようとしなかった」からである(65:67)。その理由は「独占すれば、必ず愛の神聖な特質を減ずる」ためであったとカーは記している(65:67)。

物語は舞台を変え、エンマとゲルツェン夫妻の三人が顔を合わせ、ヘルヴェークが不在であるという状況に変わった。

そのころまでに、ヘルヴェークは一切をエンマに告白していた。エンマは、ナタリヤの愛の解釈に全く共感しないどころか、その理想を理解することさえなかった。エンマにはナタリヤの理想とは「痴人の天国」であった(73:75)。そして、エンマは自分がナタリヤとヘルヴェークの間におきていることの「真相」を知っている今、そのことを一言でもゲルツェンに話せば「粉碎できる」とさえ思っていた。姦通を通じた四人の幸せな愛の調和など、エンマには想像もできなかったのである(73:75)。

エンマの愛とは、ナタリヤのそれとは大きく異なっていたことをカーは比較対照している。エンマは、他の妻たちが諦めたように、独占権の喪失を受け入れた(71:74)。しかし、彼女は「なかなか巧みであった」ことをカーは描いている。

自ら進んで諦めたと見せて、それを自分の精神的最高権を確立するのに利用したのである。彼がむらきから、このように折にふれてさまようことを、彼女は別に咎めたてしなかった。こういうことは大目に見ていたし、いや、必要があれば助力さえしたのである。見ず知らずの女たちの胸の中に、夫が時々迷い込むことは彼女には比較的大したことではないものに見えた。彼女には、彼が晚かれ早かれ、気楽さと、慰めと、それから——あの、家庭の幸福には欠くことのできない付きものを彼女が処理している限りは——金を求めて、彼女のもとへ戻ってくる、という償いになる確信があったのである(72:74)。

すなわち、エンマの愛は、より俗世的ではあったが、一般に受け入れるのが困難にも見える、現実根差していた。

実際に、ヘルヴェークのエンマに対するナタリヤとの関係の告白に、エンマは「勝利」を見出した(73:74)。

なぜなら、ヘルヴェークはどうにもならぬほどナタリヤを愛しているにはいても、「それ

は妻に対する愛情を、弱めるものでも減ずるものでもないと言った」(72:74)。そして、ヘルヴェークは「跪いて、彼は、自分を裏切ったり、見捨てたりはしないようにエンマに懇願した」のであり、さらに、付け加えたことにはもしもエンマがそうするならば「自分は自殺するつもりだ」と言ったことをカーは記してる。カーはさらに続け、ヘルヴェークがこう明言したと記している。「彼は、彼女がいなければ生きていけないのだから」と(72:74)。

以上のように、ナタリヤの描いた「だれもかも仕合せにし、みんなの間に、和合と平穏を生み出す」という理想は、ドイツ人のこの夫婦からすれば、最初から最後までありえないことにすぎなかった。カーは、ナタリヤの愛に対する考え方と、エンマのそれとを比較対照することにより、ナタリヤの理想が美しくはあれど「迷夢」であることを描いている。それにより、ナタリヤの理想がいかに可謬的であることを示唆している。

以上、本節ではナタリヤが理想としたサンド的愛の解釈は、明らかに誤謬を含んでいることを、文化的背景の違うヘルヴェークやエンマの視点によるカーの描写を分析することにより、カーが示唆する理想の可謬性について検討した。

次節では、ナタリヤが博愛精神に基づく純粋な愛であると信じていたそれは、彼女自身も気づかぬままであったが、結局その対極にある「肉体的快楽の神秘」以上の何物でもなかったというカーの指摘を検討する(79:82)。

2. ナタリヤの理想とその実相

本節では、ナタリヤが博愛精神に基づく純粋な愛であるとして掲げた理想は、彼女自身も無意識に近い状態にはあったが、結局その対極にある「肉体的快楽の神秘」であったのだというカーの指摘を検討することによって、彼女の理想の可謬性を検討する。

カーは、ナタリヤがゲルツェンと結婚した時には、内気なおびえた少女でしかなかったことを強調する(78:82)。しかし、ヘルヴェークとの一連の関係があったとき、彼女は三十二歳になっていた。カーは次のように述べている。

ナタリヤが己の惑溺に覆いかぶせていた浪漫的な隠語も、また、高所から威服せしめる代わりに、慎みもなく彼女の足元に身を投げ出す愛人で知った新たな歓喜も、すべて酌量して見ると、結局ナタリヤを引き付けていたヘルヴェークの力は、主として肉体的なものであった(78:82)。

すなわち、ゲルツェンに対する畏怖と尊敬に対して、「屈服したり、無力であったり、彼女のかいなの中に全く頼り切ってしまう」対照的な、そして前述の通り美しい容姿を持つヘルヴェークに彼女は博愛とは違う、男性としての魅力を感じたことをカーは示しているのである。

三十二歳になり、より成熟したナタリヤはゲルツェンの知らない側面を有するようにな

っていた。カーは、このように記している。

彼（ゲルツェン）はあいかわらず妻を、曇りも汚点もない純潔なものとして尊敬していたが、三十二歳になると彼女は、二十歳の花嫁として与えたり、欲したりした以上に欲したし、また与えることもできたのだということが、彼にも彼女にも分からなかったのである（79：82-83）。

すなわち、ゲルツェンにも、ナタリヤ自身も意識的に理解はできていなかったが、ナタリヤは当然二十歳のままの少女から成熟し、変わったのである。以下の一文にカーはナタリヤの愛の実相の核心を衝いている。

ナタリヤの個性の官能的な面は、ひそかに発展していた。途中で、ヘルヴェークが現れた。夫との交渉に、彼女がめぐらしていた自制と慎重の障壁は、彼に対しては存在しなかったもので、彼と共に、彼女はあらゆる禁欲を犯し、はじめて恥も遠慮もない肉体的な快楽の神秘を味わった（79：83）。

このように、ナタリヤの掲げたサンド的な浪漫主義的な愛の理想をカーは、直截的に否定し、ナタリヤの理想の可謬的性質を指摘している。

このカーの指摘は十分妥当だと考えられる。その理由として、ナタリヤは「繰り返し繰り返し反復して、『したこと、言ったこと書いたことの片鱗すらも』、ゲルツェンに達せしめてはならないと、強く要求しているのであって、繰り返し繰り返し、自分から受け取った手紙は一行も残さずに燃やしてしまうように彼に懇願している」ことが挙げられる（76：79）。

ナタリヤは決してゲルツェンも子供も捨てて、ヘルヴェークを愛することはできなかった。彼女はその理由を、姦通を通じた四人の調和が可能であるからと信じていたかったのだろうが、あきらかにカーはその理想自体が不自然であり、現実には即さないことをナタリヤ自身も知っていたと考えている。だからこそ、カーはナタリヤからの二通の手紙の引用を本文中に掲載して、彼女がヘルヴェークに「証拠」を残さぬよう懇願しているさまを表わしている。カーはその懇願を以下のように表現している。

たとえ八十年たったあとでも、これらの手紙を読む者には、無分別な闖入者の思いをさせるような懇願（76：79）。

カーはナタリヤの懇願の執拗さをこのように表現している。

以上、本節では、ナタリヤが博愛精神に基づく純粋な愛であるとして掲げた理想は、彼女自身も無意識に、その対極にある「肉体的快楽の神秘」であったのだというカーの指摘を検討することによって、カーが彼女の理想の可謬性を指摘したことを検討した。

最後に、本稿はサンド的な浪漫主義を理想とする愛の形態が、悲劇的な形で崩壊するのは、ナタリヤとアレクサンドル・ゲルツェン、そしてヘルヴェークの三者もしくは、エンマ・ヘルヴェークを含む四者の間のみではないことを付記しておきたい。本書『浪漫的亡命者たち』では繰り返し繰り返し、この悲劇的崩壊は展開されている。

『浪漫的亡命者たち』においては、ナタリヤと同様に、サンド的な浪漫主義の申し子であったニコライ・オガリョフとその最初の妻マリア・ルヴォーヴナ・オガリョフ、そしてその愛人であったイヴァン・ガラーホフとの三者間の悲劇的な関係の崩壊も描かれている。

さらには、ニコライ・オガリョフと、彼の二人目の妻であるナタリヤ・オガリョフ、そしてアレクサンドル・ゲルツェンの破滅的な三角関係も描かれている。

このことから、明らかなように、『浪漫的亡命者たち』は、アレクサンドル・ゲルツェンの革命家としての思想や生き方についての作品というよりも、1830 年から 40 年世代のサンド的な浪漫主義に影響され翻弄されたロシア人亡命者達の間味と哀愁についての物語であるといえよう。そして、その人間らしさの核心に、カーは人間の理性の可謬性を据えている。

本書の邦訳者である酒井只男は、この物語を「専門的な研究書でなく、いわば社会思想史的な伝記である」と述べているが、社会思想史というよりも、もっと人間の研究に重点を置いた書物であったと筆者は考える（カー 1953、1 頁）。

このような人間の研究を経てこそ、カーは理性の普遍性と絶対性に警鐘を促し、人間の描く理想は必ず現実と対照されたのちに、刷新され続けなければならないと説いたのではないだろうか。この思考の様式が、国際政治学における『危機の二十年』に続いていくと考えられるが、この立証にはまだ研究を重ねていく必要がある。

以上、カーによるナタリヤの理想に対する指摘を検討した。

最後に結語を示し、この論考を締めくくることとする。

結語

本稿は、E・H・カーが 1930 年代において、人間の理性の可謬的な性質へ着目していたことを明らかにすることを目的として、カーが著した伝記作品『浪漫的亡命者たち』のテキスト分析を行った。

本稿は、人間の理性における可謬性とは、この時期のカーに、肯定的に擁護されてきた視点であることを明らかにする一連の研究のうち、カー著『ドストエフスキー』の分析に続く第二段階目の考察であった。

拙稿河村 2022a、河村 2022b、河村 2023a、河村 2023b においては、カーの 1930 年代の知的営為に一貫する否定的かつ批判的視座を明らかにした。その批判的視座とは、超越的な原理に基づく知識形態であった。

また、上記の拙稿四論文においては、人間の思想は時代や置かれた場所により制約を受けるというカーの主張に照射した。

本稿は、逆説的にカーが1930年代に肯定的に擁護したものについての研究であり、上記の拙稿四論文の続編的な研究に該当する。

ロシア文学と邂逅するまでのカーは、ハスラムによるカーについての伝記にもあるように、大学時代などには19世紀イギリスの自由主義的な信念に浸りきっており、それに疑義を抱かなかった。

前述のように、19世紀イギリスの自由主義は、啓蒙思想と産業革命の影響を受けながら個人の自由、法の支配、経済的自由、議会制民主主義などを重視する政治思想として発展し、その中核には、理性に対する非常に楽観的な評価があった。

ウッドロー・ウィルソンの「十四か条の平和原則（1918）」に代表されるような、戦争は非合理的なものであり、理性に基づいた国際機構（国際連盟）を設立することによって戦争は予防できるという考え方は理性の力を過信する楽観論であったともいえる。この理性に対する過信こそ、カーが国際政治学を打ち立てた際、『危機の二十年』において、理想主義として批判したものである。

本稿は、『危機の二十年』におけるカーの理性に対する主張に連なる、彼の思想形成過程のという位置づけで『浪漫的亡命者たち』という彼の作品を研究するものであった。本稿は、なかでも恋愛というテーマから、カーが理性の可変性と限界を明らかにし、人間の可謬性について考察を深めた過程を分析した。

そして、上述のように、カーは人間の理性が可謬的であることを、ナタリヤ・ゲルツェンの理想とその実相を通じて明らかにした。

今後の課題の一端としては、以下のようなことが挙げられる。カーの著した残り二つの伝記である『カール・マルクス』（1934）と『バクーニン』（1937）にも、カーが人間の可謬性について検討しているか否かを研究する必要がある。そして、そののちには、カーが伝記作品で一貫して着目した³、人間の可謬性というものが、どのように国家間関係の秩序の研究としての国際政治学へ応用されているのか、その詳細を検討する必要がある。

カーが、国際政治学を打ち立てた際に、伝記作品を通じた人間性の研究を応用させていることを明確にすることは、後世の国際政治学で所与のものとされた見解とは異なるカーの国際政治思想を解明していくことにつながると考えられる。そのことは学問分野としての国際政治学の内省と発展に寄与するのではないだろうか。

参考文献

一次文献

³ 今後の研究の結果次第では、人間の可謬性についてのカーの考察は、全伝記作品に一貫したものではない可能性も含める。

- Carr, E.H. (1931) *Dostoevsky (1821-1881): A New Biography*, London, Allen & Unwin (松村達雄訳『ドストエフスキー』筑摩書房、1968年)。
- (1933) *The Romantic Exiles : A Nineteenth-Century Portrait Gallery*, Victor Gallancz (酒井只男訳『浪漫的亡命者たち』筑摩書房、1953年)。
- (1934) *Karl Marx: A Study in Fanaticism*, London, J. M. Dent & Sons (石上良平訳『カール・マルクス』未来社、1956年)。
- (1937) *Michael Bakunin*, London, Macmillan (大沢正道訳『バクーニン 上・下』現代思潮社、2013年)。
- (1939) *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London, Macmillan (原彬久訳『危機の二十年』岩波文庫、2011年)。
- (2000) “An Autobiography”, in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, London, Palgrave, pp. xiii-xxii (中嶋毅訳「自伝的覚書」『思想』944、2002年)。

二次文献

- Ashworth, L. M. (1999) *Creating International Studies; Angell, Mitrany and the Liberal Tradition*, Ashgate.
- Ashworth, L. M. (2002) “Did the Realist-Idealist Great Debate Really Happened? A Revisionist History of International Relations,” *International Relations* 16 (April), pp.33-51.
- Ashworth, L. M. (2006) “Where Are the Idealists in Interwar International Relations?” *Review of International Studies* 32 (July), pp.291-308.
- Booth, Ken. (1991) “Security in Anarchy: Utopian Realism in Theory and Practice,” *International Affairs* 67 (July), pp.527-545.
- Bull, H. (1969) “The Twenty Years' Crisis Thirty Years On”, *International Journal* 24 (Autumn), pp.628.
- Cox, M. ed. (2000) *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, 2000.
- Cox, M. (2010) “E. H. Carr and the Crisis of Twentieth-Century Liberalism: Reflections and Lessons,” *Millennium: Journal of International Studies* 38 (May) pp.523-533.

- Davies, R. W. (2000) "Review Essay, Jonathan Haslam, *The Vice of Integrity: E. H. Carr 1892-1982*," *The Russian Review* 59 (July), pp.442-445.
- Dunne, T. (2000) "Theories as Weapons: E. H. Carr and International Relations," in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr: A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.217- 233.
- Evans, G. (1975) "E. H. Carr and International Relations," *British Journal of International Studies*, 1 (July), pp77-79.
- Fox, W. T. R. (1985) "E. H. Carr and Political Realism: Vision and Revision," *Review of International Studies* 11(January), pp.1-16.
- Fiott, D. (2010) "Carr's Quest: Escaping the 'Rules' of International Relations?" *ECPR Graduate Conference*, Dublin, Summer 2010.
- Gismondi, M. (2004) "Tragedy, Realism, and Postmodernity: *Kulturpessimismus* in the Theories of Max Weber, E. H. Carr, Hans j. Morgenthau, and Henry Kissinger", *Diplomacy & Statecraft* 15 (September), pp.435-464.
- Haslam, J. (1999) *The Vices of Integrity: E. H. Carr, 1892-1982*, Verso.
- Howe, P. (1994) "The Utopian Realism of E. H. Carr," *Review of International Studies* 20 (July), pp.277-297.
- Johnston, W. (1967). "E. H. Carr's Theory of International Relations: A critique," *Journal of Politics* 29 (November), pp.861-884.
- Jones, C. (1998) *E. H. Carr and International Relations: A Duty to Lie*, Cambridge University Press.
- Lauer, M. (2005) "From a Bookshop in Riga: Edward Hallett Carr's Debt to Fyodor Dostoevsky," A thesis submitted to the Faculty of Graduate Studies and Research in partial fulfilment of the requirements for the degree of Master of Arts, Institute of political Economy, Carleton University, Ottawa, Ontario.
- Molloy, S. (2003) "Dialectics and Transformation: Exploring the international Theory of E. H. Carr," *International Journal of Politics, Culture and Society* 17 (Winter), pp.279-306.
- Molloy, S. (2006) *The Hidden History of Realism: A Genealogy of politics*, Palgrave.
- Morgan, R. (1974) "E. H. Carr and the Study of International Relations," in Chimen Abramsky and Beryl J. Williams (eds.), *Essays in Honour of E. H. Carr*, London, Macmillan, pp.171-180.
- Morgenthau, H. (1948) "The Political Science of E. H. Carr," *World Politics*, 1(1), pp.127-134.
- Nishimura, K. (2011) "E. H. Carr, Dostoevsky, and the Problem of Irrationality

- in Modern Europe,” *International Relations* 25 (March), pp.45-64.
- Rich, P. (2000) “E. H. Carr and the Quest for Moral Revolution in International Relations,” in Michael Cox (ed.), *E. H. Carr, A Critical Appraisal*, Palgrave, pp.198-216.
- Schmidt, B. C. (1998) *The Political Discourse of Anarchy: A Disciplinary History of International Relations*, SUNY Press.
- Schmidt, B. C. (2002) “On the History and Historiography of International Relations,” in Walter Carlsnaes, Thomas Risse, and Beth A. Simmons (eds.), *Handbook of International Relations*, Sage, pp.3-22.
- Smith, M. (1990) *Realist Thought from Weber to Kissinger: Political Traditions in Foreign Policy Series*, Louisiana State University Press.
- Thompson, K. W. (1980) *Masters of International Thought: Major Twentieth Century Theorists and the World Crisis*, Louisiana State University Press.
- Torbjørn, L. K. (2008) “A Lost Generation? IR Scholarship before World War 1”, *International Politics* 45 (November), pp.650-674.
- Wilson, P. (2000) ‘Carr and his Early Critics: Responses to The Twenty Years’ Crisis’ in Cox ed., *E. H. Carr: A Critical, Appraisal*, Basingstoke and New York, Palgrave, pp.165-197.
- Wilson, P. (2001) “Radicalism for a Conservative Purpose: The Peculiar Realism of E. H. Carr,” *Millennium: Journal of International Studies* 30 (January), pp.123-136.
- 飯田鼎 (1954) 「E・H・カー著 浪漫的亡命者たち」『三田学会雑誌』47 (6)、690 (104) –692 (106) 頁。
- 遠藤誠治 (2003) 「『危機の二十年』から国際秩序の再建へ—E. H. カーの国際政治理論の再検討 (帝国・戦争・平和)』『思想』第 945 号:47—66 頁。
- 遠藤誠治 (2009) 「『危機の二十年』の現実主義論」『外交フォーラム』第 22 号 2 巻: 22—25 頁。
- 河合秀和 (2008) 「新刊旧刊『誠実という悪徳』 E・H・カー 1892-1982」『アーナ』452—458 頁。
- 河村しのぶ (2021a) 「西村邦行著『国際政治学の誕生—E・H・カーと近代の隘路—』に関する一考察」『総合文化学論輯』第 14 号:1—21 頁。
- 河村しのぶ (2021b) 「E・H・カーのリアリズムの起源と『ドストエフスキー』の影響」『総合文化学論輯』第 15 号:1—23 頁。

- 河村しのぶ (2022a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『ドストエフスキー』と『危機の二十年』の共通点として」『総合文化学論輯』第 16 号：85－109 頁。
- 河村しのぶ (2022b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：『浪漫的亡命者たち』において」『総合文化学論輯』第 17 号：19－41 頁。
- 河村しのぶ (2023a) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記『カール・マルクス』における『資本論』に関するカーの議論を基に」『総合文化学論輯』第 18 号：21－41 頁。
- 河村しのぶ (2023b) 「超越的な原理に基づく知識形態に対する E・H・カーの批判的視座：カー著伝記作品『バクーニン』における静的な一元性に対する批判的考察」『総合文化学論輯』第 19 号：21－40 頁。
- 河村しのぶ (2024a) 「E・H・カーと人間の理性の可謬的性質（1）：カー著伝記『ドストエフスキー』に関する分析」『総合文化学論輯』第 20 号：37－60 頁。
- 酒井只男 (1953) 「訳者の序」『浪漫的亡命者たち』筑摩書房。
- 佐藤史郎、三牧聖子、清水耕介編 (2022) 『E・H・カーを読む』ナカニシヤ出版。
- 西村邦行 (2010a) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 1」『法学論叢』第 166 号 5 巻:84－99。
- 西村邦行 (2010b) 「E. H. カーにおけるヨーロッパ的なものの擁護 2」『法学論叢』第 167 号 3 巻:18－139。
- 西村邦行 (2010c) 「知識人としての E. H. カー：初期伝記群と『危機の二十年』の連続性」『国際政治』第 160 号:34－47。
- 西村邦行 (2012) 『国際政治の誕生－E. H. カーと近代の隘路－』昭和堂。
- 西村邦行 (2014) 「第一次大戦から 100 年 E・H・カーから考える第一次大戦と現代」『公明』第 107 号：56－61 頁。
- ハスラム、ジョナサン (2007) 『誠実という悪徳－E. H. カー 1892－1982－』角田史幸、川口良、中島理暁訳、現代新潮社。
- 三牧聖子 (2014) 『戦争違法化運動の時代－「危機の 20 年」のアメリカ国際関係思想』名古屋大学出版会。
- 山口育人 (2019) 「＜書評＞山中仁美・佐々木雄太監訳『戦争と戦争のはざま－E・H・カーと世界大戦－』」『史林』102 (5)：796-801 頁。
- 山中仁美 (2003) 『E・H・カー研究』の現在の状況をめぐって」『国際関係学研究』第 29 号:139－147。

- 山中仁美 (2014) 「西村邦行著『国際政治学の誕生：E・H・カーと近代の隘路』」
『国際法外交雑誌』第113号3巻：475-479。
- 山中仁美 (2017) 『戦間期国際政治とE・H・カー』岩波書店。
- 山中仁美 (2017) 『戦争と戦争のはざままで』ナカニシヤ出版。

[E. H. Carr and the fallible nature of human reason (2)—An analysis of Carr's biography, *The Romantic Exiles.*]

[KAWAMURA, Shinobu・元九州大学大学院法学府博士後期課程・日本翻訳連盟認定翻訳士、産業翻訳事務所代表・現在の研究テーマ：E・H・カーの国際政治思想]。